

◎県手をつなぐ育成会広報 IT 部会は、機関紙「山口手をつなぐ」だけでは不足する障害関連の情報を補完するために、新聞各社のご了解を戴き、2011年4月号より、発行月までに報道された新聞記事を収集し、「新聞切り抜き帳」として編集し、2~3ヵ月に1回、会員向け必見の情報をお届けしています。

◎切り抜き帳の閲覧はホームページで… [山口県手をつなぐ育成会(検索)一般財団法人 山口県手をつなぐ育成会項目お知らせ(クリック)新着情報(から選ぶ)]

教育・実態調査(1頁)、 県内話題(1)、 虐待データ(2)、 選挙・代理投票手引き(2)、  
制度見直し・総合支援法改正案(3,4)、 就労支援・個性と企業マッチング(5)、  
障害者雇用促進法・他(6~9)、 発達障害者のパートナー必見シリーズ(10~17)、  
当欄は各ページの内容概要を標記しました ※()内数字は当該項目の頁

1頁	- 学ぶ育む - 特別支援学級の実態 初調査 障害特性に対応不十分	読売 4.5.3
1頁	発達障害のある人たちの作品展 山口 絵画や書道,立体作品など100点	山口 4.3.28
2頁	障害者虐待 最多2400件 20年度、家族や職員から	山口 4.3.30
2頁	知的障害者向け選挙の手引き 市民団体,代理投票を説明	山口 4.6.27
3頁	障害者ホームに新たな種類創設へ 24年度、一人暮らし支援	山口 4.6.14
3頁	虐待通報義務化明記せず 精神医療検討会 障害者団体など批判	山口 4.6.11
4頁	精神科強制入院縮小へ 厚労省法改正 虐待通報義務化も	山口 4.3.22
5頁	障害者才能 データで開花 個性を指標化、就職実現	山口 4.7.3
6頁	障害・病気の子を育てる親 キャリア諦め 新聞業界内の実態調査	山口 4.4.16
6頁	障害者の働く機会拡大へ 短時間も可、厚労省意見書	山口 4.6.18
7頁	- 安心の設計 - 障害者の創作 連携で後押し プロとデザイン 商品に反映	読売 4.5.3
8頁	(7頁の続き) 手仕事で張り子 郷土玩具に	読売 4.5.3
9頁	- 暮らしの広場 - タオルに障害者アート 愛媛、自立促進へ商品化	山口 4.4.8
10頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす① 思い通じず2人でも孤独	読売 4.5.23
11頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす② パートナーのケアも必要	読売 4.5.24
12頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす③ カウンセリング懸け橋に	読売 4.5.25
13頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす④ 質問攻め「尋問みたい」	読売 4.5.27
14頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす⑤ 集団療法受け 話しやすく	読売 4.5.28
15頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす⑥ 自助会で語り合い 共感	読売 4.5.30
16頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす(反響編)	
	「共感」「励まされた」声届く	読売 4.6.7
17頁	- 医療ルネッサンス - 発達障害の人と暮らす(反響編) 受診につなぐ難しさ	読売 4.6.8

**地元育成会の所在情報については、市役所・町役場の福祉担当窓口でお確かめ下さい**

※育成会は知的障害児者の家族会です。全国組織(約20万人)を構成しており、国の福祉法制立法や改正時の機会には、参画して意見具申等を行っています。

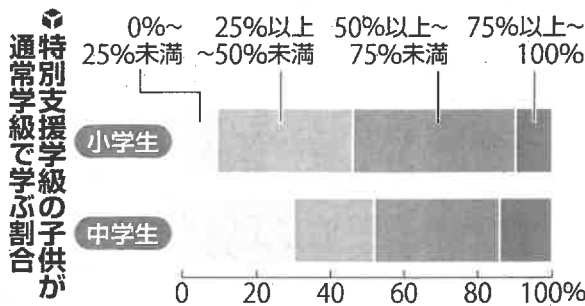
## 特別支援学級の実態 初調査

### 障害特性に対応不十分

通常の授業が多め

特別支援学級で学ぶ知的障害や情緒障害などのある小中学生の5割ほどが、授業の半分以上を通常学級で受けていることが、文部科学省の初めての調査でわかった。文科省は4月27日、各教育委員会に対し、「障害の特性や心身の発達に応じた指導を十分に受けていない事例がある」として、特別支援学級で週の半分以上を目安に授業を行うよう求める通知を出した。

調査は昨年度、特別支援学級に在籍する児童生徒の割合が高い10道府県市の公



立小中学校を抽出して実施。9888学級、計5655

8人の状況をまとめた。

調査の結果、特別支援学級に在籍する児童生徒で、総授業時数の半分以上を通常学級で過ごしていた子供の割合は、小学校で54%、中学校で49%だった。学年別では、小1~2年では19%、20%だが、小3以上になると67%と増える。中1~3は46%、51%だった。調査では、個別の障害の特性や心身の発達に応じた学習が不十分なケースも発覚した。▽算数と国語以外の教科は通常学級で指導するなどカリキュラムが機械

的で画一的▽知的障害の児童生徒に多くの教科を通常学級で授業▽通常学級での授業で、通常学級の担任だけが指導し、十分な学びが得られていない▽保護者や本人に学ぶ場の選択肢を説明していない—などが、文科省は通知で、障害の有無にかかわらず共に学ぶ「インクルーシブ教育」の重要性を指摘しつつ、障害のない子供との「交流」にのみ重点を置いて通常学級で授業を受けさせることは適切ではない、と指摘。一人一人の教育的ニーズに最も確に定める指導を行うよう求めた。

特別支援学級は、小中学校の8割以上に設置されている。在籍人数は昨年度、10年前の2・1倍に増え、約32万6500人だった。

### 発達障害のある人たちの作品展 山口 絵画や書道、立体作品など100点



発達障害のある人たちの絵画や書道、立体などの作品が並ぶ—27日、山口市滝町

自閉症など発達障害のある人たちの作品展が27日、県庁そばの県政資料館旧県会議事堂(山口市滝町)で始まった。4月9日まで、ける「など力強く描いた畫、好きなアニメのキャラクターを立体で表現した工作など個性豊かな作品が並んでいる。

「世界自閉症啓発デー(4月2日)」「発達障害啓発週間(同日~8日)」に合わせ、県とNPO法人県自閉症協会が発達障害に理解を深めてもらおうと聞き10回目。絵画や書道、立体作品など約100点を展示している。

猫や象などの動物を描いた絵画や、「夢」「道は開

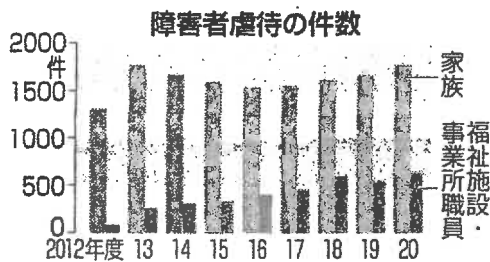
同協会親の会の椎木弥寿子会長は「障害があると聞くとも感じがちだけど、普通に生活して絵を描くなど作品を作ることでもできる。偏見の目を持たずに見てもらえれば」と呼び掛ける。展示時間は午前9時から午後4時半まで。月曜は休館。

(大下秀幸)

# 障害者虐待最多 2400件

## 20年度、家族や職員から

厚生労働省は29日、2020年度に障害者が家族や福祉施設・事業所の職員から受けた虐待が2400件あり、被害者が2665人になったと発表した。前年度から198件、267人増え、いずれも過去最多。このうち1人が死亡した。自治体への相談・通報も9



※厚生労働省による。2012年度は法施行後の半年分のみ

421件で最多だった。12年施行の障害者虐待防止法に基づく調査。厚労省は同法の通報義務が浸透し

たことが増加理由とみている。新型コロナウイルス感染症拡大の影響については「一概に増加につながることは言えない」としている。職員による虐待は632件で、被害者は890人だった。内訳（複数回答）は暴力や拘束などの身体的虐待が53%と最も多く、暴言などの心理的虐待が42%、性的虐待が16%だった。被害者は知的障害が72%。加害者は生活支援員が38%、管理者が10%などだった。死亡したのは、精神障害でグループホームに入居する40代の男性だった。家族に

よる虐待は1768件、1775人。身体的虐待が67%、次いで心理的虐待が31%、障害年金を渡さないとい

いった経済的虐待が17%だった。被害者は知的障害が48%、精神障害が42%。

## 知的障害者向け選挙の手引

### 市民団体、代理投票を説明

7月10日投票の参院選を前に、知的障害があっても自分で書くことが難しい人でも投票できることを知ってもらおうと、投票所の職員が代筆する「代理投票」について説明した手引を市民団体が作成した。当事者や家族、福祉施設などに無料で配布している。

手引は「知的障害者・家族・支援者のための選挙のしおり」という名称で、A5判12頁。有識者や障害者団体職員らでつくる「障害をもつ人の参政権保障連絡会」（東京）が作った。

代理投票は、知的障害者に限らず、自分で書くことが難しい人が投票したい候補者や政党名を職員に伝えて代筆してもらう制度。具体的な方法をよく知らない人も多いことから、分かりやすく解説している。

「選挙公報の切り抜きや候補者の写真などを持っていこう」「家族や支援者が書いたメモは認められないケースが多い」「持参した公報などを家族らが係員に渡すことはできない」などと、注意点を列挙。自筆できず人でも、忘れたり緊張

したりして記入できない場合は、自分で書いたメモを持参できることを説明している。

手引の申し込みや問い合わせは同連絡会事務局のメール（[takanashi96@gmail.com](mailto:takanashi96@gmail.com)）。

### 障害者ホームに 新たな種類創設へ 24年度、1人暮らし支援

障害者の福祉や就労に関する厚生労働省は13日、社会保障審議会（厚労相の諮問機関）の部会で、制度改革に向けた報告書をまとめた。障害者が少人数で共同生活するグループホーム（GH）について、1人暮らしやパートナーとの同居を望む人を支援する新たな種類を設けることなどが柱。

厚労省は年内の臨時国会に障害者総合支援法の改正案を提出し、2024年度にも導入したい考え。報告書には、就労支援の新たな仕組みを設けることも盛り

#### 障害者の福祉や就労支援に関する報告書のポイント

- 1人暮らしを目指す人を支援する新たな種類のグループホームを導入
- 障害者の希望や適性を調べ、適切な就労先につなげる「就労選択支援」（仮称）という新サービスを創設
- 企業で働き始めた頃に就労支援の障害福祉サービス併用も認める

込まれた。

GHはアパートのような建物で世話人らの手助けを受けて暮らす。基本的には共同生活を続けることを想定している。ただ、中には1人暮らしなどを希望する人もいるため、金銭管理や家事など自立生活の練習を提供する新たな種類をつくる。一定期間内での移行を目指す。利用者の状況に応じて入居を延長したり、従来型のGHへ転居したりもできるようにする。

就労については、職場の環境整備や支援によっては企業で働くことができるのに、福祉の作業所に通うケースがあるため、「就労選択支援」（仮称）という新しいサービスを創設する。福祉職が本人の希望や適性、配慮すべき点を関係者から聞き取って調査。ハローワークなどと意見交換し、適切な就労先につなげる。

このほか、障害者が企業で働き始める際、徐々に新しい職場に慣れて定着できるように、就労支援の障害福祉サービスも併用できるようにする。

## 虐待通報義務化明記せず

### 精神医療で 障害者団体など批判

精神医療に関する厚生労働省の有識者検討会は10日までに、報告書をまとめた。直前までの案では、精神科病院で虐待に気付いた職員らに自治体への通報を義務化する方針を明記していたが、盛り込まなかった。強制入院の制度についても、当初案にあった縮小方針を削除。いずれも日本精神科病院協会が反発したためとみられ、後退した。

厚労省は年内の臨時国会にも精神保健福祉法改正案

を提出する方針だが、当事者や障害者団体からは「患者の権利が守られない」と落胆や批判の声が上がっている。

虐待については、福祉施設や雇用主には障害者虐待防止法で通報が義務付けられているが、医療機関は対象外。2020年に神戸市の精神科病院で看護師ら6人が逮捕された事件を受け、病院にも通報義務を課すよう求める声が高まっていた。

報告書は、前回までの案では「通報義務の仕組みを設けることについて、制度上の対応を検討するべきだ」としていた。だが、最終的には「通報義務」の文言を削除。「虐待の早期発見、再発防止に資する制度化に向けた検討を行うべきだ」と曖昧な表現となった。

強制入院の一つである医療保護入院を巡っては、厚労省は検討会で当初「制度の将来的な廃止」を掲げたものの、相次いで方針を後

退。縮小の方向性も撤回し「将来的な見直しについて検討」という記述にとどまった。

精神科病院では現在、「多動または不穏が顕著」な場合、隔離や身体拘束が認められている。報告書は「不適切な隔離・拘束をゼロとする」として、多動や不穏だけでなく「患者への治療が困難で、放置すれば生命にまで危険が及ぶ恐れが切迫している」などの条件を追加。対象を明確化すべきだとした。

このほか、医療保護入院の一部の患者を中心に、福祉職ら外部の支援者が訪問して相談に乗る新たな仕組みを導入する。

# 精神科強制入院縮小へ

## 厚労省 法改正 虐待通報義務化も

精神科病院の医師が家族らの同意を得て患者を強制的に入院させる「医療保護入院」について、厚生労働省は21日までに、制度の将来的な廃止も視野に入れ、縮小する方向で検討に入った。医療保護入院は精神科の入院患者の半数近くを占め、不要な長期入院が問題になっているほか、国際的に人権侵害との批判が出ている。前身の制度ができた1950年以来、厚労省が廃止を打ち出すのは初めてとみられる。

精神科病院を巡っては、虐待事件も絶えないことから、厚労省は病院職員らに虐待の自治体への通報を義務付けることも検討。有識者検討会での議論を踏まえ、早ければ年内に精神保健福祉法などの改正案を国会へ提出する方針だ。

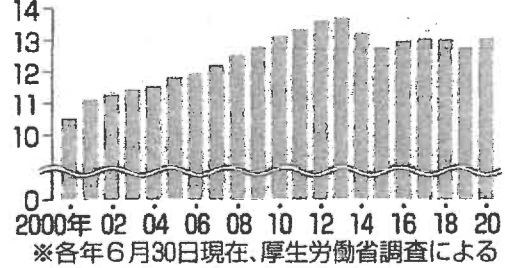
精神科の入院制度は医療保護入院のほか、自分や他人を傷つける恐れがある人を都道府県知事らの権限で強制的に入院させる「措置入院」、本人の同意に基づき「任意入院」がある。厚労省によると、精神科の入院患者約27万人のうち、約13万人が医療保護入院。厚労省は訪問診療など地域医療の態勢を強化すること、入院前に重症化を予防したり、退院を促進したりする考え。入院の要件

を満たすかどうか、半年ごとの確認を病院に義務付ける案も出ている。虐待については、福祉施設や雇用主には障害者虐待防止法で通報が義務付けられているが、医療機関は対象外。2020年に神戸市の精神科病院で看護師ら6人が逮捕された事件を受け、障害者団体などから病院にも通報義務を課すよう求める声が高まっていた。厚労省は同法が精神保健福祉法の改正で対応する考え。

精神医療の現状 厚生労働省によると、精神障害のある人は2017年時点で

全国に約419万人いる。うち入院患者は20年6月時点で約27万人。6割は入院期間が1年以上で、10年以上も約4万8千人いる。病床数、入院期間とも先進国の中では突出している。疾患別では統合失調症が半分以上を占めるが、認知症も約4万8千人に上る。全体的に高齢化が進み、6割超が65歳以上。医師や看護師の配置基準が低いため身体拘束や隔離、鎮静のための薬投与が安易に行われているとの批判が根強い。

精神科の医療保護入院の患者数



# 障害者才能、データで開花

## 個性を指標化、就職実現



パソコンで文書を仕分ける平井颯さん  
(左)＝5月、川崎市

## 雇用企業とマッチング

川崎市の障害者就労支援会社「ダンウェイ」が、通所者の特性や作業態度といった個性をデータとして指標化するシステムを開発し、就職の実現につなげている。必要な力があるかどうか、雇用する企業側が客観的に確認できるのが利点。計約160人が働く場を見つけた。自らも障害のある子を持つ高橋陽子社長(48)は「多くの才能を開花させ、自立をかなえたい」と意気込む。

「赤いペンを10本持って

## 障害者雇用システムの仕事



きて、ダンウェイの事業所で、スタッフがデータを入力するため、通所者に色や数の理解について尋ねる。

システム「システムズバテイ」は色や数の概念対人スキル、言語理解といった計約300項目を確認し、5段階で指標化する。現在は約300人が仕事を求めて登録。企業側は重視する要素を検索して人材を抽出し、適材適所のマッチングが成立する。

ダンウェイは2011年、障害者の就労機会を増やすために創業。社内エンジニアがシステムを開発した。20年にクラウドサービスとして外部に発売。マッチング機能などに特許も取得した。雇用側の企業だけでなく、障害者の就職実現を目指す事業所などの利用も増えている。

システムは、個々の障害者の力を伸ばすため、「成長計画」を提案する機能も

魅力だ。これまで登録した計約1200人がどんな訓練をし、働けるまで成長したかを「カルテ」として蓄積。類似した障害の人が利用する際、効果的な成長計画を立案する。

中度知的障害のある平井颯さん(25)は、他の事業所で通所を断られ続けたが、この機能で才能が目覚めた。文章を読むのは難しい一方、文字の形を視覚的に記憶できると判明。過去のカルテから、集中力や時間の感覚を向上させる成長計画を立て、就労を目指した。

周りに物を置かず、スタッフが時計の絵を見せる工夫を重ね、能力が向上。パソコンに差込まれる登記簿や不動産契約書を見て内容を正確に把握し、仕分ける仕事ができるようになった。

「障害者だからできない」との先入観と戦う。ダンウェイの高橋社長は信念を語る。長男颯さん(18)は自閉症で、重い知的障害がある。保育園では学力テストの手定すら知らされなかった。偏見を解消し、親子で後に経済的に自立できる環境を整えようと、社会保険労務士の資格を取って起業。地域との関わりを重視して商店街に事業所を構え、企業に営業も重ねている。

今後は人工知能(AI)も導入し、システムを強化する。高橋社長は障害への固定観念を持っていても、データで覆される。雇用の未来を憂えたい」と思いを込めた。

## 障害・病気の子を育てる親 キャリア諦め 新聞業界内の実態調査

新聞社や通信社で働きながら障害や病気の子を育てる親の団体は14日、育児と仕事の両立に関する調査結果を発表した。両立を巡る困り事を複数回答で尋ねると、介助のために頻繁に仕事を休む必要があるとの答えが45・1%に上った。勤務時間短縮のため希望と異なる職場で働くなど、キャリア形成を諦めている実態が明らかとなった。

医療的ケア児を育てる親の会」の関係者は「多くの人が働きやすい社会をつくりたい」と訴えた。行政や企業への支援策の要望を検討している。

2021年11〜12月、新聞労連を通じ加盟組合に調査への協力を呼びかけた。障害や病気の子の親51人が答え、子どもの23・5%は「常時見守り・介助が必要」だった。

両立の困り事は「自分や配偶者が倒れたら家庭が回らなくなる」が54・9%、「通院・通所たびたび仕事を休んだり抜けたりしている」が45・1%に上った。「子の体調や情緒が不安定で学校などを休みがち」「自分や配偶者が転勤を言い渡された」もあった。

自由記述では「管理職への内示を辞退した」「キャリア形成は諦め、子育てを優先している」との声が見られた。

### 障害者の働く機会拡大へ

厚生労働省は17日の労働政策審議会（厚労相の諮問機関）分科会で、障害者が働ける機会の拡大に向けた意見書をまとめた。一定数の障害者雇用を企業などに義務付けた法定雇用率制度を巡り、算定対象に精神障害者ら週10時間以上20時間未満で働く人を加えることが柱。企業に雇用のインセンティブ（動機づけ）を与える狙い。短時間での就労希望者の増加が背景にある。

早ければ、秋に見込まれる臨時国会に障害者雇用促進法などの改正案を提出したい考えだ。

算定対象は現在、障害の種類に関わりなく、勤務時間が週20時間以上の人。意見書は、算定対象に新たに、いずれも勤務時間が週10時間以上20時間未満の精神障害者、重度の身体障害者と知的障害者を追加すべきだと盛り込んだ。

短い時間であっても就労意欲のある人には、自立に向けて働ける環境を整える必要があると判断した。

# 安心の設計

## プロとデザイン、商品に反映



①三島市でのワークショップを企画した久世さん(左)と加藤勝也さん(右後方)  
 ②クロス・カンパニーが手掛けた名古屋のリスホテルスライターの2021年春の内装模写写真



# 障害者の創作 連携で後押し

障害がある人の創作活動を後押しするため、企業やプロのクリエイターなどと連携して新たな製品を開発する取り組みが注目されている。斬新な作品が商品のパッケージデザインや、郷土玩具などに活用されており、障害がある人の活躍の場を広げる追い風になっている。(田中文香)

3月下旬、障害がある人の就労支援などに当たるNPO法人「エシカファーム」(静岡県三島市)の事業所で、地元の風景を題材に水彩画を描くワークショップが開かれた。企画したのは、障害がある人とプロのデザイナーらが共同で制作したアート作品を、企業の商品のデザインなどに生かす事業を手がける「クロス・カンパニー」(東京)だ。

この日はデザイナーの久世卓さん(51)、アドバイザーの加藤勝也さん(63)らが事業所を訪れ、水辺や桜などの写真を見ながら、障害のある人と一緒に筆やスポンジで描いた。

クロス・カンパニーが住宅メーカー「ミサワホーム」(東京)から三島市の住宅展示場の仮囲いを地域の人と一緒に彩りたい」と依頼され、つながりがあつたエシカファームとの協業を表現。久世さんが作品を仮

囲いの装飾に仕上げ、エシカファームの利用者にも売り上げの一部を還元する。

### 報酬得られる場に

加藤さんの息子、順正さん(20)には知的障害を伴う自閉症がある。クロス・カンパニー設立のきっかけは、順正さんが特別支援学校に通っていた頃、知人だった久世さんが生徒たちの作品を見て感銘を受けたことだ。「障害がある人がプロとともにデザインや商品の開発に加わり、働く場や報酬を得られる新たなモデルを作ろう」と、2017年に会社を設立した。

約20社から仕事を受注し、自動販売機のラッピングやゼリーのパッケージなど様々なデザインを手掛けてきた。順正さんと障害がある「チャレンジド・デザイナー」約10人が登録して報酬を得ている。

名古屋市のホテルの内装デザインを受注した際には、地元の特別支援学校の生徒たちと一緒に原画を制作。売り上げの一部を還元するなど、各地の団体との協業も進める。加藤勝也さんは「新たなワークスタイルとして定着させ、社会参画の機会を増やしたい」と話す。



# 手仕事で張り子 郷土玩具に

奈良県香芝市の「Good Job」センター香芝は、障害がある人の新たな仕事を生み出す拠点だ。プロのクリエイターやデザイナーのほか、企業などとの協業で、新たな商品を開発している。中でも障害がある人の手仕事と、3Dプリンターを組み合わせた張り子は、新たな郷土玩具として人気を集めている。

張り子作りのきっかけは、15年、工芸品の製造・販売などを手掛ける「中川政七

商店」（奈良市）からの依頼を受けたことだ。奈良の鹿の玩具をモチーフにした張り子制作につながった。

## 3Dプリンターで型

木型の代わりに3Dプリンターで樹脂の型を成形。上に和紙や新聞を重ねて貼り、スタンプを用いた終仕上げは手作業で行う。施設の利用者から募ったデザイン案を生かした千支にちなんだ張り子や、外部のクリエイターとコラボした張り子など、これまでに50種類以上を制作してきた。

現在の看板商品は、施設内のカフェで提供している

ホットドッグをモチーフにしたキャラクター「グッドドッグ」の張り子だ。原型となったのは、センターの関連施設で、アーティストの中村真由美さんが作った張り子のクマの作品だ。作者の子承を得て、工業デザイナーに詳しいスタッフが商品化した。

センターを運営する「たんぽぽの家」（奈良市）は、1973年から芸術・文化活動を通じ、障害がある人が生きがいを持って活動できる拠点作りを進めてきた。

一般企業での就労が難しいと、所得が低い上、仕事の内容の選択肢が限られる。センター長の森下静香さんは、「障害がある人ひとりひとりが得意なことを生かせる新たな仕事を作り、福祉サービスを受けるだけでなく、社会で役割を果たせる存在となる拠点にしていきたい」と語る。

クロス・カンパニーと「Good Job」センター香芝で生み出された作品などを、読売新聞オンライン（YOL）の「デジタル美術館」に掲載しました。下のQRコードから読めます。



3Dプリンターと手仕事を組み合わせて作られる張り子（奈良県香芝市）

写真からつづく

# タオルに障害者アート

愛媛県内の障害者が描いたアート作品をデザインに使うタオルが販売中だ。県など昨年、障害者の自立や社会参加促進を目的に「障がい者アートデザインコンペ」を開催し、商品化につながった。

関係者は「すてきな感性で描かれたものばかり」とアピルする。

コンペに応募した障害者とデザイナーがチームを組んで案を練り、受賞した計3組のアイデアを磨き上げた上で協賛企業が商品化した。

知的障害を伴う自閉症がある特別支援学校高等部の伊藤泰介さん(17)・松山市の伊藤

ラストは、愛媛県今治市の「コンテックス」社が作るタオルに採用。伊藤さんは小さい頃から絵を描くのが大好きで、記念のつもりで参加したという。

パートナーとなった松山市のデザイナー佐川剛さん(48)は、同じモチーフでいくつもイラストを描く伊藤さんの個性を生かして、キャッチコピーを含めた具体的な商品のイメージを考えた。「アーティ

ストの良さを発見して引き出し、企業に伝えるのがデザイナーの大切な役割だ」と話す。

伊藤さんの母佳美さん(47)

は「支援がないと商品化はできなかった」と喜ぶ。コンテックスの近藤聖司社長(64)は「プロの作品としてビジネスが成り立つ」とし、今後も販売を継続すると語った。

コンペの企画に携わった松山市のデザイナー和泉明子さん(43)は、商品化には商業デザイナーの知識が必要で、障害者や支援者だけでは難しいと指摘。コンペで障害者

がデザイナーと知り合えたことは今後につながるとして、「魅力的な感性を強みにして、自分がやりたいことで社会とつながってほしい」と話した。

## 愛媛、自立促進へ商品化



障害者が描いたアート作品をデザインに使ったタオルを紹介する和泉明子さん(松山市)

# 思い通じず2人でも孤独

性はストレスがたまっていた。発達障害だと知らず「怠慢」だと思った。一方、夫は結婚したくなかったの

「夫にどう向き合えばいいのか分からなくて……。思いを共有できず、一緒にいるのに、一緒にいないような感じでした」

東京都の会社員女性(42)は、会社員の夫(39)が2019年に「自閉スペクトラム症(ASD)」と診断された当時を、そう振り返る。ASDは、対人関係を築くのが苦手とされる発達障害の一つだ。

2人がつきあい始めたのは15年前。社会人の音楽サークルで知り合った。お互いマスコミ関係の仕事をしている共通点もあった。女性は「勉強熱心で、知識が豊富などところを尊敬し、惹かれた」。

「社交的で明るくて、一緒にいると楽。よく面倒みてくれる人だ」と彼も好意を持った。交際から5年、女性はプロポーズを受けた。だが、徐々に彼の言動を不可解に感じ始める。

何年たっても結婚の話が具体的に進まない。「将来どうするの?」と尋ねても、黙りこんでしまう。相手を不快にするような発言もあった。女性が「私が作った料理で何が好き?」と聞くと、「勝手に作っているから分からない」と悪気なく言う。こだわりが強く、自分の好きな音楽や政治の話になると止まらないが、人の話には関心を示さない。

「このような言動は、ASDによく見られる特徴です」と、ASDに詳しい昭和大学発達障害医療研究所長の太田晴久さんは話す。個人差はあるものの、対人関係やコミュニケーションが苦手、興味・関心の偏りなどが主な症状だ。先を見通したり、相手の気持ちを想像したりすることが得意な人が多い。こうした彼の態度に、女

性も「彼を人として尊敬していい」。自身が体調を崩したのをきっかけに、真剣に話し合おうと、彼は「じゃあ、結婚しよう」。

実際から10年、ようやく結婚した。女性は37歳。早く子どもがほしいのに、性交渉がなく、何を考えているのか分からない。家の鍵のかけ忘れなども気になった。注意しても理解されず、危険だということも伝わらない。「2人でいても孤独」。通勤中にも涙が出るようになり、別居を切り出した。

「自分は普通じゃないのかも」。夫は19年、自分の症状をインターネットで調べ、発達障害にあてはまるのではないかと思い、専門のクリニックに行くことにした。

(この項つづく)  
(このシリーズは全6回)



\*過去記事はミニドクターで



発達障害について調べた本を並べ、これまでの生活を振り返る夫婦

# パートナーのケアも必要

「自閉スペクトラム症(ASD)ですね」

東京都の会社員女性(42)は2019年夏、大人の発達障害を専門的に診るクリニックで、夫(39)の診断結果を一緒に聞いた。

「それって、何なの……」

ASDは発達障害の一つで、対人関係やコミュニケーションが苦手で、こだわりが強いという特性がある。アスペルガー症候群や自閉症などと呼ばれてきたが、最近の国際的な診断基準では、こう総称されるようになった。生まれつきの脳機能障害が原因で、約100人に1人おり、男性が女性の約4倍と報告されている。

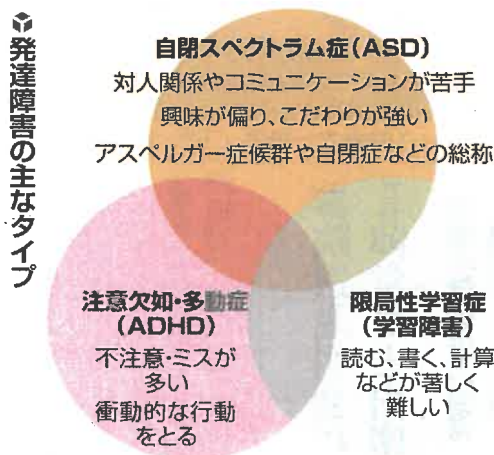
夫は、鍵のかけ忘れなど不注意を妻に怒られることが多いため、自分では「注意欠如・多動症(ADHD)」を疑っていた。しかし、心理検査や精神科医に

よる問診を受け、「ADHDが併存している可能性が顕著」と告げられた。

「ASDは裏表なく純粋な人が多いが、相手の気持ちから分らないため、怒らせるようなことを悪気もなく言ってしまう。一方、ADHDの人は相手が怒ると理解できても、衝動的に言ってしまうという違いがあった。」

「妻と幸せになるために、自分を変えていきたい」という自指す未来があり、前向きに受け止めようとした。

※三つのタイプが併存する人もいる



夫は、診断を受け、「自閉スペクトラム症(ASD)と注意欠如・多動症(ADHD)が併存している可能性が顕著」と告げられた。

「ASDは裏表なく純粋な人が多いが、相手の気持ちから分らないため、怒らせるようなことを悪気もなく言ってしまう。一方、ADHDの人は相手が怒ると理解できても、衝動的に言ってしまうという違いがあった。」

「妻と幸せになるために、自分を変えていきたい」という自指す未来があり、前向きに受け止めようとした。

一方、女性には希望が持てないでいた。「診断されたからといって、夫の不可解な行動がなくなるわけではないじゃない」

状況が改善しない中、ASDの人との暮らしに悩むパートナーの

ことを、俗に「カサンドラ症候群」と呼ぶことを知った。

ASDは知的レベルが高く社会的に問題なく見える人もおり、パートナーは、周囲に悩みを相談しても信じてもらえない場合がある。それを、ギリシャ神話に登場する王女カサンドラが予言を信じてもらえず苦しむ姿になぞらえた。正式な病名ではないが、女性は、同じ境遇の人がいることに救われた思いがした。

「夫の苦手なことをどうカバーするかばかり考えていたけど、私自身にも心のケアが必要なんだ」。そう思い、夫婦でカウンセリングを受け、ASDに向き合うことにした。

「診断はゴールではない。障害への理解を深め、本人だけでなく、家族の幸せにもつなげるスタートなのです」と、太田さんは話す。

(この項つづく)



※過去記事は「ミミ」ドクターで

# カウンセリング懸け橋に

東京・青山のマンションの一室に、発達障害の本人や家族の相談を多く受けている「青山」の相談室がある。

東京都の会社員女性(42)が、発達障害の一つ「自閉スペクトラム症(ASD)」と診断された夫(39)と初めて訪ねたのは昨年2月。以降、毎月1回通っている。ASDの診察やカウンセリングでは、本人の生きづ

らさを軽減することが主な目的で、家族は「特性を理解し、支えてあげて」と求められることが多い。

「ただ、どう理解し、関わればいいのか悩んでいる家族は少なくない」と、相談室代表で、臨床心理士の滝口(たぐち)のぞみさんは指摘する。

家族には、ASDの人の思考パターンを説明し、「不可解」と見える行動には理由があると理解してもらうことが重要だという。



不妊治療の末、妊娠した女性(右)と夫。2人は「新しい命を築きだせるようになった」と感謝している」と話す。

滝口さんはまず、夫の思考パターンを説明。ASDの人は、想像したり、先を見通して計画したりするのは苦手だが、方向性を示せば具体的に詰めるのは得意だ。それを「0から1を生み出すのは不得意だが、1から100にする能力は優れている」と表現した。

「だから、受動的で怠惰な人に見えたんだ」と女性には納得した。「旅行に行くときは、私が行き先を提案し、夫にルートなどを調べてもらおう」と、考え方を

変えることができた。滝口さんは「ASDの人の考え方を理解することで、不可解な行動が不可解ではなくなり、不安が軽減して向き合えるようになる。その手助けをしています」。女性

性は「私のつらさを肯定してもらえ、心が軽くなった」と笑顔を見せる。夫も、妻との向き合い方

を学んだ。以前は目的がないと会話の必要性を感じなかったが、「植物を育てるには土を掘り起こすなど手入れが必要なように、親しい間柄でも、自ら『耕そう』とするアプローチが大事」と教わった。

そこで、夫は朝起きたら、「よく眠れた？」などと意識して声をかけるようにした。「滝口先生は、僕にも分かるように妻の思いを翻訳してくれた」と感謝する。ただし、カウンセリングには課題もある。発達障害に詳しい専門家ばかりではなく、質が様々だ。また、多くは公的医療保険の対象にはなっていない。

ASDの特性が消失するわけではない。夫も、声かけの大切さは学んだが「臨機応変に対応できないので事前にいろんな想定をしている」。それでも、女性には、うれしい努力だ。「以前のような孤独感はなくなった。今後も向き合い、いい家族になっていきたい」

◇次回は27日に掲載します。

くらしの家庭

# 質問攻め「尋問みたい」

東京都の50歳代の女性は2020年夏、夫(50)とともに昭和大烏山病院(東京都世田谷区)を訪れた。夫は発達障害の一つ「自閉スペクトラム症(ASD)」と診断された。

「『やっぱS』と思う一方で、何を言っても伝わらない人だと告げられたようで、複雑な気持ちだった。結婚から16年たった。2人は同じ民間団体の講師として知り合った。」「彼の



夫(左)は診断後、毎日ブログを更新し、女性との生活や仕事での気づきを発信している

のピュアで優しく、まじめなところを好きになった」

しかし、一緒に暮らし始めると、彼の行動に戸惑った。体調が悪い時、気遣ってもくればゲームに熱中する。言葉を額面通り受け止め、意図が伝わらない。最もつらかったのは、結婚から6年目、妊娠中のことだ。夜中に大量に出血し、不安に襲われていた時、夫はいびきをかいて寝ていた。「この前の妊婦健診で、

医師に『妊娠が継続できるか微妙だ』と言われたことを伝えていたのに、全然分かってない」

翌朝、夫と病院に行くのと、超音波検査の画像を見た医師に「流産しています

ね」と告げられた。絶望する女性の横で、夫はなぜかワクワクした様子で「画像が見られるんですか」と尋ねた。夫は医師の言葉を理解していないように見えた。

夫の主治医で、昭和大名誉教授の加藤進昌(しんしょう)さんは「ASDの人は何をすべきか明確に示されていない状況が苦手で、現実から目を背けてしまいがち」という。女性は、命を失った悲しみから、次の妊娠に向かう気持ちになれず、夫婦に子どもはいない。「振り返ると、ともに悲しんだり、乗り越えたりした感覚がない。全部、自分一人で頑張ってきたなと思う」

結婚9年目には、夫の借金もとで自己破産した。仕事に必要なお金を計画的にためられず、誰かに借りることは考えられず、夫に疲弊した。翌年、夫が転職して在宅時間が長くなると、

話をするたびに質問攻めにあうようになった。「尋問みたい」と感じ、一緒にいると叫び出したくなるほど追い詰められていった。

「自己破産したのは、目標を決め、計画を立てることが苦手というASDの特性が影響していると考えられる。質問が多いのは、会話の全体像を捉えるのが不得意のため、細部に執着してしまうからだ」と、加藤さんは解説する。

夫の言動でどれだけ悩んでいるか分かってほしい――。女性は、ASDの特性がある人の妻が書いた本を夫に薦めた。「こんなに傷つけていたんだ」。夫は初めて妻の思いを知った。

その後、ASDの診断を受けた夫は、有効な治療薬がないと医師から説明を受けた。「私はどうすればいいんですか」。夫はわらにもすがら思いで尋ねた。

(この項つづく)



\*過去記事はヨミドクターで



# 集団療法受け話しやすく

東京都の50歳代の女性は、自閉スペクトラム症(ASD)の夫(50)の変化に驚いている。「夫が病院の集団療法を受けてから、会話がしやすくなった」

社員の夫は、2020年夏に診断を受け、主治医で昭和大名誉教授の加藤進昌かとうすすむねさんから、集団療法を勧められた。



夫が今春から通い始めた小石川東京病院の集団療法。「ここでは、ありのままの自分でいられる」と話す

ケーシヨンの仕方を学ぶ。生活しやすくすることを目指すもので、ASDの人への支援法として有効だと考えられている。

夫は20年秋から1年間、昭和大烏山病院(東京都世田谷区)で月2回開かれるプログラムに参加。10人前後で輪になり、臨床心理士の司会で「会話を続ける」「自分の特性を伝える」などのテーマで、ディスカッションや疑似練習をした。

「相手への気遣い」がテーマの日は、悩みを聞かれた夫は「体調が悪そうな時には、『大丈夫?と聞いて』と妻に言われたので、聞いたら『マニアルみたい』と叱られた」と打ち明けた。他の人たちも困っている

ことや工夫を語った。

「一般の人には当たり前にできる会話や気遣いについて集中的に話し合えることや、悩んでいるのは自分だけではないと分かることが、癒やしになった」

この集団療法は、08年に同病院で全国に先駆けて始まった。当時から携わる精神保健福祉士の五十嵐美紀さんは「自分と似た特性を持つ仲間と出会い、思いを共有し、支え合う『ピアサポート』の意義も大きい」と指摘する。

夫も、他の人の工夫を聞くことで、引き出しが増え、日常生活の中で試してみようになった。「これまで、自分なりの気遣いの方は、自分の外れで、怖くて、結局何もしてこなかった」

ていないのか」と気づいた。これまで会話は何か目的を達成するためのものだと捉え、間違いがあつてはいけないと細かく聞いていた。「今は、おしゃべりして一緒にいることの方が大事なので、多少間違いがあつてもいいと思えるようになった」と目を輝かせる。

ただ、夫の変化を感じつつも、女性には変わらない深い悩みがある。「一緒に時間を共有している感じが私には見ることができない」

夫は「愛する妻のために、もっと自分を変えたい」と、今春から主治医の加藤さんが勤務する小石川東京病院(東京都文京区)の集団療法に通い始めた。

加藤さんは「この集団療法でASDの特性が消えるわけではない。他者と関わる体験を積み重ねることで、家族の悩みを軽減できる可能性がある」と話す。



\*過去記事は「ミミドクター」で

# 自助会で語り合い共感



「フルリアル」の会合で、悩みを持つパートナーらの話を熱心に聞く真行さん（中央）

発達障害に詳しい、ハートも参加できる。

「フルリアル」の会合で、悩みを持つパートナーらの話を熱心に聞く真行さん（中央）も参加できる。

自閉スペクトラム症（ASD）など、発達障害の特性がある人と暮らすパートナーが集まり、語り合う場がある。横浜市を拠点にパートナーを支援する団体「フルリアル」が、4月10日に開いた会合には、首都圏から男女24人が参加し、悩みや体験を打ち明けた。

「産後うつでつらい時、夫に『育児向いてないんじゃない？』と言われた。戸惑っている」と、そう思った理由を延々と説明された「私の夫は、言動を反省し始めたが、それまでがひどくて許せない」

クリニック横浜（横浜市）で院長を務める柏淳さんは「本人に問題意識がない場合、発達障害が疑われても、家族が医療機関を受診させることは難しい」と指摘する。

医療の枠の中で対応してもらえず、悩むパートナーにとって、こうした取り組みは頼りになる。「似た境遇の人に共感してもらえると、メンタルの不調が緩和する人もいる」と話す。

真行さん自身、夫は診断を受けていないもののASDの特性があり、約20年悩んだ。周囲に孤独感を理解されず、精神科で「うつ状態」と診断され、会社を3年間休職した。15年に離婚し、「今は2人の子どもの親として、いい関係を築いている」という。

支援の輪は広がっている。フルリアルに参加していた横浜市の女性（39）らが4月、新たな自助グループ「おやこ」を作った。夫や妻だけでなく、子どもにも発達障害がある人たちが語り合う。女性もこのケースで、「同じ状況の人と励まし合う場がほしかった」という。

こうした経験から、「自分を大切に生きることが、心身の不調から回復する道だと気づいた。その手助けをしたい」と真行さん。参加者も「他の人の心の傷の深さに共感できた」「仲間がいると分かった」「救われた」と話す。

柏さんは「子どもに発達障害があると診断された後で、親も診断される場合がある。どこに相談したらいいかわからず、悩む人は少なくない」と説明。「こうした自助グループのほか、自治体が設けている『発達障害者支援センター』などの公的支援も活用してほしい」と助言している。

（次は「変わる薬局」です）



※過去記事はヨミドクターで

（大沢奈穂）





# 「共感」「励まされた」「声届く

5月23日〜30日に掲載した「発達障害の人と暮らす」

(全6回)には、多くの反響が寄せられた。連載では、夫が発達障害の一つ「自閉スペクトラム症(ASD)」の夫婦を取り上げた。

2人でいても孤独……。連載1回目で、夫に思いが伝わらず悩む妻の言葉を紹介すると、「結婚して33年、ずっと抱え込んでいたことを、一言で言い当てられたような気がします」と、関東地方に住む女性(62)から便りが届いた。

この女性の夫は診断を受けていないが、興味・関心に偏りがあり、「コミュニケーションが苦手といったASDの傾向がある」とい、「一番つらいのが『伝わらない』ということ」だと訴えた。仕事に打ち込むことで、夫のことを深く考えないようしてきたという女性性は「記事を何度も読み、

涙が出る思いでした」。

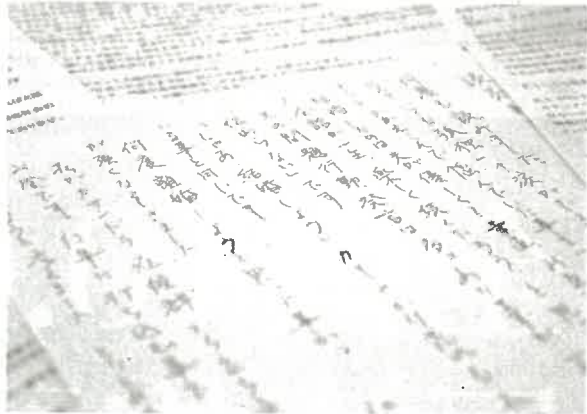
東京都の女性(57)からは

「今までの自分が認められなかったような思いになり、励まされました」との声が寄せられた。夫にASDの疑いがあるといい、「人の気持ち」が分からない。子どもの今後のことを想像できず、意見がない。数人で話している」と場違いのことを言う「う」などの言動に悩み、離

婚を考えたこともあるという。

そんな中で、「同じ境遇の人が頑張っていると思えば涙が出ました」とつづる。高齢の親族への対応に苦悩する人もいる。

横浜市の50歳代の女性は、義母の死去を機に、数年前から義父と同居している。「話し始めると止まら」といった言動が目立つ義父。インターネットで調べると「発達障害」に行き当たった。「役所に相談すると、認知症の診察を勧められた」とい。だが、検査の結果、可能性は低いと言われた。



読者から寄せられたファックスやメール

の専門病院に連れて行くのが悩んだが、診断されたところで高齢の義父の行動は変わらないだろうと思ひ、やめた。幸い、夫は理解してくれるが、「現実的な解決の見通しはありません。自分の気持ちに折り合いをつけ、時には諦めながら、自分を見失わないように過ごしていくつもり」と記す。「共感できる内容があり、少し気持ちが楽になりました」

発達障害の本人や家族の相談を多く受ける「青山こころの相談室」(東京都渋谷区)の代表で、臨床心理士の滝口のぞみさんは「思いが伝わらないのは、とても深い悩みだ。『自分が無価値だから、関心を持ってもらえない』と、思い詰める人もいる。一人で頑張るすぎず、自分を大切にしてほしい」と強調する。その上で、「ASDの人は、悪気はなく、学習することで言動が変わることがある。家族は、行政の窓口や専門家を頼ってほしい」と話す。



# 受診につなぐ難しさ

「発達障害の人と暮らす」  
 (5月23日〜30日、全6回)  
 には、発達障害が疑われる  
 人を診断につなげる難しさ  
 を訴える声も届いた。

近畿地方に住む女性(52)  
 は、「記事に登場した夫婦  
 は、夫が受診し、障害を受  
 け入れ、協力してくれるよ  
 うになった理想的なケース  
 だと思います。現実にはそ  
 こまでたどり着ける人の方  
 が少ないのでは？」との疑  
 問を寄せた。

この女性の夫も、発達障  
 害の一つ「自閉スペクトラ  
 ム症(ASD)」の傾向が  
 あるというが、受診には至  
 っていない。「夫は不便を  
 感じていないようなので、  
 私ひとりが努力して疲れて  
 しまったというのが、我が  
 家の現実です」E漏らした。  
 東京都の女性(57)も、発  
 達障害が疑われる家族との  
 向き合い方に悩んでいる。  
 夫の言動を精神科医に相

談し、ASDと限局性学習  
 症(学習障害)の可能性を  
 指摘されたことがある。さ  
 らに、夫の母親や、長女に  
 も、発達障害が疑われる言  
 動があるという。

検査を受けるように女性



が提案したが、「変なのは  
 あなただ」と言われた。女  
 性は、うつ状態になり、心  
 療内科に通院中だと、メー  
 ルでつづった。

大人の発達障害に詳しい  
 ハートクリニック横浜(横  
 浜市)で院長を務める柏淳  
 さんは、「本人に問診をし  
 ないと診断はできないが、  
 発達障害にマイナスのイメ  
 ージを持ち、医療にかかる  
 ことを警戒する人もいる」  
 と話す。診断については、  
 「『悪いところを直しなさい』  
 という意味ではなく、  
 長所と短所を自覚し、生活  
 の質を向上させるためのも  
 のだと、本人に理解しても  
 らうことが大切だ」と指摘  
 する。

家庭内で解決しない場合  
 には、行政や専門の医療機  
 関に相談する。

昭和太田山病院(東京都世田谷  
 区)では、自閉スペクトラム症  
 の人向けに集団療法を行って  
 いる(画像は一部修整しています)

関のほか、発達障害の特性  
 がある人と暮らすパートナ  
 ーらが悩みを語り合う場  
 も、助けになる。支援を行  
 うグループには、横浜市や  
 仙台市を中心に活動する  
 「フルリアル」や、東京や  
 静岡などに活動拠点がある  
 「アスペルガー・アラウン  
 ド」、関西地域で自助会を  
 開く「にじいろ」がある。

一方で、ASDと診断さ  
 れた本人が「妻とのコミュ  
 ニケーションを改善させたい」と悩むケースもある。  
 そうした問題を抱える男性  
 に特化した集団療法が、小  
 石川東京病院(東京都文京  
 区)で、5月から始まった。  
 月1回のペースで開催して  
 いく。

同病院医師の加藤進昌(のりまさ)  
 さんは、「同じような悩みを  
 共有することで、本人の気  
 づきにつながる。悩んでい  
 る人には、中高年が多いの  
 で、同じ年代の人が集まる  
 ことで、ピアサポート効果  
 を高めたい」と語る。

(次は「原発不明がん」)  
 (大沢奈穂)